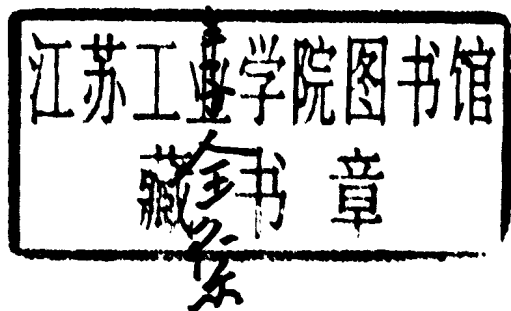


野上陽子全集

第Ⅱ期

第二十四卷

鄂上



第Ⅱ期

第二十四卷

岩波書店

野上彌生子全集

第II期 第二十四卷

第二十六回配本

(全二十八卷)

一九九一年一月三十一日 発行

定価四六〇〇円

(本体四四六六円)

著 者 野 上 彌 生 子

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三三六五・四二一(案内)

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

明治三十六年	一	大正九年	三六
明治三十八年	三	大正十年	四〇
明治三十九年	二	大正十一年	四二
明治四十一年	五	大正十二年	四三
大正三年	六	大正十三年	四九
大正四年	九	大正十四年	五三
大正五年	二七	大正十五年	五九
大正六年	三〇	昭和二年	四四
大正七年	三四	昭和三年	四六
大正八年	三六	昭和四年	五三

昭和五年	二七
昭和六年	二八
昭和七年	二九
昭和八年	二〇
昭和九年	二七
昭和十年	二五
昭和十一年	二五
昭和十二年	二六
昭和十三年	二三
昭和十四年	二四
昭和十五年	二八
昭和十六年	二五
昭和十七年	二〇
昭和十八年	二四

昭和十九年	二八
昭和二十年	四三
昭和二十一年	五〇
後記	六七
書簡索引	六三

明治三十六年（一九〇三）

小手川次郎

（封筒欠）
二月九日

一

久しく御うかゞひも申しませずに失礼のみ致してをりますが兄様には御きげんよく入らつしやいますか お漁は如何です 相かはらずお盛に御出成されますか 私事はおかげで別に大した病氣などもなく無事にすぐしてをりますから御安心なされ下さいよ

さて先日父上から煙草入を買つておくれで二円御送付に相成りましたから早速お送り申さうとおもひながら日曜でないと外出しないものだから終／＼おそく相成りまして実にすみません あれで御まにあひませうか 恰二円といふのがありませんでしたから一円八十銭のにいたしました 十五日お正月には間にあふだろうとおもひます、

さてお哲姉さんにも御変りはありませんか 今回は別に手紙をあげませんから兄様からよろしく御伝言を願ひあげます

四月も近付いて参りました 私はもう高等科まで居るときはめてゐるのですが父上や母上はいかゞでしやう このまゝに普通科でよしてしまへば上りかけた梯子を半分で下りる様な有様で実に／＼

残念でたまりません 如何にもして兄様と姉様との御尽力で都合よく参ります様にどうぞ／＼御願ひ申します 諸友が皆よるとさはると四月の話ばかりしあつて高等科まで居ると云ふ様な事をきくと私はどうなるのだろうともう／＼心配で／＼たまりません どうぞ一生の御願ひですから御力添えを祈り上げます お父様は実に御上京成さるのでしやうか、

私の目的が立つのでしやうか この手紙つきしだい兄様の御ゐる見を御しらせ下さいまし

二月といふも僅の月日ですから実に気がもめて成りません 東京は先日一尺許りも雪がふりましたまだ消えのこつて今日なんかは風が大変にあらいのですよ 終にのぞみて兄様と姉様永久の御親和を祈ります

まづは用事のみ

二月九日

八重子拝

なつかしき 兄上様にまゐらす

明治三十八年(一九〇五)

小手川常次郎

大分県臼杵町 小手川父上様
二月十五日 東京神田金沢町三二 小手川八重子

二

父様お手紙うれしく／＼拝見いたしました 臼杵も中／＼の大寒だそうですね 夫にもおきけなく御無事で御出であそばすそうで何より安心致しました 私もこの頃は風も引かず元氣よくして居ります

母様がわざ／＼御親切をこめての下され物六神丸昨日たしかにとゞきました

あゝ父様、母様、この深い／＼御親切御慈愛八重は何日の時に御恩返しが出来ませうか 小包を見ました時にはあまり／＼の忝じけなさ、涙がこぼれて泣きましたよ あゝ如何して不養生が出来ませう 父様や母様の御恩愛をおもへばたゞ自分一人の身軀だ(と)おもつてはなりません 父様や母様からしばし預つて居る物とおもつて大切に注意致しますから必ず／＼御心配下さいません様に、大塚様と成よし様とが御上京のよし国の人にあふのは嬉しいけれども折角たのしみにまつて居た父様の春の御上京が御流に成つたかとおもふとほんとに失望致しました いやですねえ父様 大塚様なんかゞ上京すれば父様はもう入らつしやらないのでしやう どうぞ入らつしやるわけには参りま

せんの

伯父の社もすぐ金沢町の家の側に少しの空地がありますので其所をかりて六疊許りの西洋室を作り本日出来上りました

社もこゝに引越すのだそうです その序に私の部室の天上が穴が一尺四方ばかりあいて、雨が洩りまして困つて居りましたので夫に天上がはつてなかつたのです 二円計り出して天上を張つて貰ひました 夫は本日一日で出来りましたのもう雨はおろか火が降つても大丈夫と嬉しくぞんじます しかしお小使が足りなくなりそうなのです まだ一円五十銭計りありますけれども本日お千代さんに老円貸しましたから月末まで足りなからうとぞんじます どうもちよい／＼貸りられるので困ります 本月も、四十銭、五十銭が二度夫に今よひ一円ですからもし御都合がよかつたならこの手紙つきしだい少しお小使を送つて頂戴な

記念画葉書が出ましたから送ります 実は哥でもかいてとおもひましたけども画の上に書くのは殺風景ですし夫に空間が少し、ありませんから大書などはとても出来ませんのでむしろなんにもかゝずに後世の紀念に蔵しておいた方がいゝとぞんじますから岩本やにもあげて下さい

臼杵には御坐いませんとぞんじます 中／＼高いのですよ これだけで三十銭です

光ちゃんの目は困りますのねえ とかしめて養生をしなければ大変ですね お薬は承知致しました 一日も早い方がいゝとぞんじますから小包で送る事にいたします

二箱二円分送りませうから小使を送つて下さる時にお金を送つて下さいまし 夫とも御都合で学資の時までいゝ宜しう御坐います 先生の所なんですから何日でもいゝのです

お餅はまだ食べぬ先から涎が三千丈といふ有様です 壱円加へて頂いたお正月のはもう／＼とくの昔食べてしまいました、そうです十五日まで位ありましたかしら

もうちら／＼と梅見の折となりました あゝ「吉野／＼かしこは桜こゝは梅」よしのゝ梅見に兄様やなんかと行つた事もありましたのねえ 何につけかにつけ懐郷の念つきぬ名残りよ どうぞ／＼御變りのない様に神様に祈つて居ます

まづ／＼あら／＼かしこ

二月十五日夜

八重子拝

なつかしの父様

母様

向の伯父様に別に手紙さしあげませんから父様から社の移転、新築の西洋室の事を話して頂戴靴がきれてはけなく成りました 三十五十銭で出来るのですから買い度いとおもひます

小手川常次郎

大分県臼杵町 小手川父上様
九月十日 神田金沢町二一 小手川八重子拝

三

すぐ電もて御しらせ申しました通り私共は昨朝無事に着京致しました すぐ手紙をさしあげ様とぞんじましたけれども何分長路のたびにつかれはてまして失礼を致しました、

昨日はまあ荷物などはそのまゝにすぐ休みまして今朝起くると一人でそろ／＼と片づけました、もう／＼一先型がつけましたから、父上様に手紙をあげ様とおもつて、日のあたるまどのもとで静に

筆をとりあげました　まあ、何からお話を致しませうやら、独つく／＼とおもひまはせばとんとまるで夢の様な気がしてなりません

たのしい二月を慈愛深きお二人様のお膝のもとにあまへて、いひ度い事し度い事の限りをしてをりました昨日まで、あゝ今こゝからなんと云つてお礼を申あげられませうか、

よしや筆でかゝなくともこの八重がどれほど嬉しなみだにかきくれてたかといふ事はおわりのことゝぞんじます、

さがり松の夜半にこゝろ淋しいおわかれを致しましてから、幸に海にも波風おだやかに高松まで参りますと大坂の新聞ではじめてこちらの大騒動をきゝました、

さあ、どうせうと云ふ所でどうとしかたがありませんから、とにかく神戸まで行て様子を見てからの事となりまして神戸に参りますとそこも大分大騒ぎの様子、とにかく東京に電をかけての上といふ事に致しまして芝の小野さんに豊さんがきゝあはせました所が、別に人民をどういふ事はないけれどもなるべくなら東京に朝の中に着く様にして来いとの返電で御坐いましたので同行のものが皆相談致しましてあけの日の十一時四十分のにする事にしました所がそのばん楠公社の伊藤侯の銅像をたゝきこはしたとかで、夫は／＼ワッ、ワッ、と物すごい声が町中をひゞきました、東京にはあけの日の午前九時につきました、お千代さんが車夫と来てくれました、

こちらの中／＼一夜二夜はおち／＼寐られぬ位いだつたそうですけれども、だん／＼下火の様子で御坐います、

夫は夫として、巡査などのそちらの方に計り奔走してる隙をつけこんで泥棒が沢山には入りこんだ

そうで御坐います、而してごろつき書生なんか女などを悪い事をする様で御坐いますから、しばらく一人では外出しない事にしてをりますから御心配下さいません様に、広い所の事ですから、もう／＼その騒がないところは何かあるのか常とは少しも違つた有様は見えず、物しづかな様子にて

みな／＼やじ馬の人／＼のよしにて 曰杵あたりはなんの事はなく ほんとに詰らぬさわざと心ある人／＼は眉をひそめをり、

後に金を出す人がかくれて居るとの風評にて

叔父様も先日は少しく御かげんわるかりしとかなれども今は中／＼御丈夫にて、

どんなとばかりのかゝらぬともわからず、余りなに／＼もとりあはぬ様にとお千代にも申その後母様にはなんの御変りもなく

どうぞ／＼御身軀を大事になさる様祈りをり

あの夜お帰りの時ははや夜あけ前にてひらひしまゝあけがたの寒風にもしやお風邪などをめしはせざりしやと船中にていひつゞけ

あまり何事も心配なされず御自愛のほどたゞ／＼たのみ入り

二階のおばさんにもよろしく 少しかたづきしだいめがねを送ると申つかへ下され度

番頭をはじめ、くらのおやじ下男女中にも、よろしく御伝へ下され度
まづはとりあえずおたよりまで あら／＼かしこ

九月十日

八重子拝

なつかしき父上様

母上様

光ちゃん、

武ちゃん、

いくら呼んでも返事をしないのねえ、しないはずだ、もうわかれてしまつた」のだもの、またあひ度くなりましたよ、なぜ姉さんはこんなに気がよくなつたんだろう、あひ度のよ

光ちゃん、

武ちゃん、

どんべはたつた一人で寐ました、つひ先夜まで三人枕をならべて笑つたり、お話をしたり、けんかしたりして寐たものをおもふたら、淋しくつて、泣き度いほど淋しかつた、ほんとをいへば少し泣いた、光ちゃんも武ちゃんもキット姉さんと同じ様に淋しがつて居るんだろうとおもつたら、可愛そうで、またすぐと引き返して帰り度い様な気がした、

おもしろかつた二月

夢の様な二月

まだ中／＼魂は東京に戻つては来ぬ様だ、キットお台所か、お部屋のすみにかくれて居やう、

武ちゃんは学校で眠むかつたでしやう、

よく姉さんが話した事をおぼへて勉強してくれなくちゃあいけませんよ　ねえ武ちゃん、立派な男にならなくちゃあ、白杵の人の風なんか見ならつてはいけません、

光ちゃんもよくお母様のいふ事をきいて、心配をさせぬ様に、上手に立ちまはらなければいけませんよ、光ちゃんのそんですからねえ、

朝おきるとすぐおくの二ツ煙草盆と、店の父様のと、兄様のとを、キットわすれぬ様に、もし光ちゃんがおきぬ先に人が火をいれてあつてもまた消えた時にはお前の身になるのだから、よくいけ工合を見てまた活けなをしておくのですよ、決し「て」姉さんがいつもいふ通りに、光ちゃんが悪い事はありませんけども、よく上手にしないからいけません よく氣てんをきかして母様を助けていかねばいけませんよ、

お部屋をちらしてきたからよくかたづけて下さい、

「労働は神聖なり」といふ西洋の名句があります、

父様や母様があんしんをする様に、目も氣をつけてはやく直る様にせねばいけません、

ピン、ピンはすぐ豊様が買ってくれるでしやう、そのなかには中が入つてをるか、鬼が出るか、蛇がでるか、仏様がでるか、神様がでるか、

時／＼手紙を頂戴よ、

武ちゃんほん時に時／＼お出なさいよ さよなら、

あゝ下り松でもさよなら／＼といひましたねえ、

まだ耳にのこる そのさよなら、

こひしき武ちゃん

光ちゃんへ

姉さんより

此朝は手紙をあけて見るそうですからその積りで

明治三十九年（一九〇六）

小手川常次郎

大分県臼杵町 小手川父上様 おもとに
五月五日ひる 東京神田金沢町三二 小手川やへ子拝

四

たゞ今価額表記のお金ならびにありがたき御手紙忝じけなく拝し申し、父上様母上様ますく御きげんよく入らせられひよし、何よりのことゝ賀し奉りひ、わたしも病氣の方は殆んど全快と申してもさしつかへなきほどに相成りひらへども、なほ用心して保養致しをりひまゝお二方様とも決してく御心配下されまじく、なほこの上に御心配などを相かけひては八重は不孝の罪に地獄のそこ深くなげこまれひべく、神も仏もしるわがまごゝろにてはひらへども……

本月は十日頃博文館より八円ばかり取れる事これありひまゝ先月のぶんを十日まで約して使用すれば雑用にはさしつかへなしと予算致しおきひらひしにてひ、

先月館におくりひ元稿は豊一郎の三、私の所にて都合約三十円計りの収入これありひうち私のが八円ばかりあるはづにてひ、これは片瀬の銀行にて、片瀬にて使用せし金は、大方これにてとりもどしと相成りひ、

叔父上様の事酒井様よりおきゝとりのよし何と申されゝかしらねど、おそらく酒井様はおぢ上につきて御存じのことは少なかるべしとぞんじゝ、

おぢ上はたゞ今は蓄財一方の人となりをりゝ、つね／＼、五万の金を作るまでは世間などから何といはれやうが、かんといはれ様がかまはぬと申すが口癖にてゝ、

もはやかれこれにて三千円位はあるかともぞんじゝらへども手許には少しもなく、みな貸出ある様子にて、随分高利の様にきゝおよびゝ、どの位の利子かはよくぞんじゝらはねども質やの利などよりはズット高利にて、貸すときにその利を引くそうにてゝ、一人の大工は百五十円計り貸りをりて毎月十円づゝ利子を取られる様にてゝ、どの位の割になるのにてゝや、

貸出しある所は、その大工と、印刷やと、書物やとその他の三四軒とうす／＼しりをりゝ、しかし私にはその様な事は少しもきかせ申さずゝ、穩になりたりとの事にゝらへども、何の變つたほどの事はこれなくゝ、相變らず随分わけの分らぬ事を申ゝ、

私も少しもよくは相成らず、家内は社の者三人に下女車夫のぢゝい、と夫婦に私とにゝらへども昼晩の菜の代が一日十錢づゝにてゝ、勿論おぢ様とお千代様のは別な物にゝ、小使帳を私が月末に計算するのにてゝが、一人前僅に三円五十錢内外をこえず、夫にて社のものよりは五円づゝの食料を取るのにてゝ、何も／＼この様子にて万事御推し下され度ゝ、

会などには弍円以上の会費なれば行き申さずゝ、交際する人と申しては宅に来る人は金を借りる人とか位いなもの、所謂代議士連などの交際は本部などのみの交際にて宅になぞ来る人は少しもなくゝ、いな家と家との交際をなしをる家はこれなしと申すもさしつかへなくゝ、私などいろ／＼の知